国指定重要無形民俗文化財

角館祭りのやま行事

角館（かくのだて）のお祭り

九月七日・八日・九日

秋田県仙北市角館町

かくのだて
角館

屋敷林も見事な武家屋敷

歴史と伝統のなかに今も生きる町

みちのくの小京都としても知られる角館は応永年間(1420年頃)、豪族戸沢氏が門屋城(仙北市西木町)から古城山(166m)に角館城を築き、仙北北部(北浦と称します)を支配下に置きました。戸沢氏は天正18年(1590年)には秀吉から4万4千石の知行を与えられています。

関ヶ原合戦後の国替により、1602年常陸から佐竹氏が秋田に転封となり、角館城には佐竹義宣の弟で元会津60万石の領主であった芦名義勝が1万5千石を与えられ角館城主になります。角館城は1620年に一国一城令により破却されますが、義勝はこれまでの古城山の北側にあった城下を180度回転させて、現在の角館の地に新しい城下町を縄張(町割・都市計画)します。この城下町は享保年間(1730年代)の町割絵図によると、侍屋敷250、足軽60、町家420、寺院等25という小さな城下町ですが、北と東に小高い山があり、西と南に川と平野が展開するという「四神相応の地」という京都を縮小したような地形です。町割は火除地より北の侍町を内町とし、南を町人町の外町と区分しました。

承応2年(1653年)の芦名氏断絶後、佐竹一門の北家が所預となり角館地方一帯を治め、明治まで続きます。佐竹北家の角館初代の佐竹義隣は公家の高倉家の生まれで、二代目義明の正室は三條西家の生まれです。

町割はもとより、血筋でも京都と所縁のある角館は、「国天然記念物」の枝垂桜でも有名です。『北家御日記』には京都から多くの庭の樹木の苗木を購入していることが書かれていますが、枝垂桜もこうした折に求められたものか、あるいは三條西家から角館に嫁いだ正室がお持ちになったのではないかという伝えもあります。

「角館のお祭り」は、藩政時代の町割と武家屋敷、自然が今も残る角館で江戸時代中頃から受け継がれています。

平成17年角館町は田沢湖町、西木村と合併して仙北市角館町となりました。

目 次

角館　歴史と伝統のなかに今も生きる町 ……1
角館のお祭りとは ……3
成就院薬師堂　角館神明社……4
角館のお祭りの歴史 ……5
角館のお祭り三日間 ……9
おやま囃子(囃子・踊り) …… 15
ヤマを飾る人形 …… 16
ヤマ18台…… 17
継承される角館のお祭り …… 20
歴史と文化の町　角館 …… 21

角館絵図

享保年間（1730年頃）

仙北市
情報センター蔵

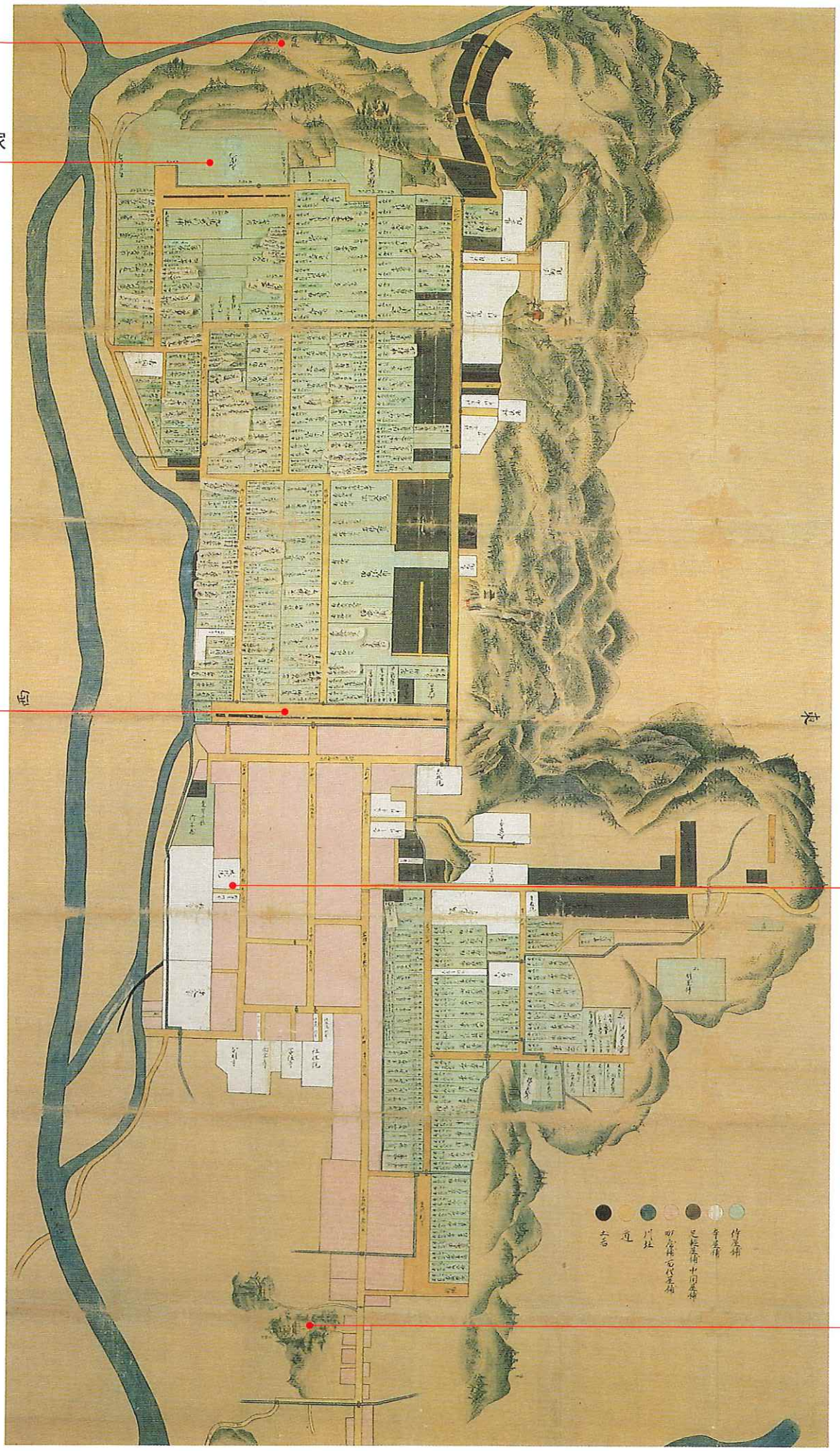
古城山

佐竹北家屋敷

火除（ひよけ）

成就院薬師堂

伊勢堂（神明社）



『角館のお祭り』とは

「角館祭りのやま行事」は角館では『角館のお祭り』と呼ばれ、毎年9月7日から9日までの3日間、角館神明社と成就院薬師堂の祭典に合わせて行われる祭りで、18丁内から出される武者人形や歌舞伎人形を飾った大型のヤマを江戸時代から残る町並みで曳き回します。ヤマには「おやま囃子」の囃子が乗り、囃子に合わせて「手踊り」が舞われます。

ヤマは7日夕刻に神明社へ参拝し、8日は江戸時代角館を治めた佐竹北家当主の上覧を仰ぎ、また8日、9日にかけて成就院薬師堂を参拝します。

この祭りの特徴はヤマの曳き回しの道筋が決まっておらず、参拝や上覧の時間や道筋を各丁がそれぞれ独自に決めるところにあります。そのため城下町の狭い道路でヤマ同士が頻繁に鉢合わせとなり、その都度通行優先権についての交渉が行われます。交渉が決裂するとヤマのぶつけあい「やまぶっつけ」が行われます。「やまぶっつけ」が行われる最中でもヤマの上では「おやま囃子」は止むことがなく奏でられます。

また曳山のほかに動かない大きな置山も各所に置かれます。

この祭りは江戸時代から神仏への信仰とともに地域の繁栄、豊作、無病息災を願う角館の人々により脈々と引き継がれてきました。

1991年(平成3年)に「角館祭りのやま行事」として国の重要無形民俗文化財に指定されました。

成就院薬師堂

角館を戸沢氏が治めていた時代に勝楽村の産土として信仰されていました。城主が眼病にかかった際、山谷の薬師に祈願したところ平癒したことから祈願所を設けたのが起源とも伝えられています。現在の町割の前には、旧角館小学校の跡地(伝承館南側)にあったとされております。

薬師堂は真言宗智山派のお寺の成就院に祀られ、新しい町割とともに現在地に移転しましたが芦名氏・佐竹北家時代と長きに亘り庇護を受け、「お薬師さん」と呼ばれて角館の人々の守り神、産土として信仰を集めました。

明治維新の神仏分離で一時期、勝楽神社となりましたが本尊が仏体(薬師瑠璃光如来)であるとして真言宗の別社として薬師堂に戻りました。

お寺ではありますが山門には鳥居があり、明治初期に薬師神社とも称したなごりが見られます。9月8日祭典、9日御輿渡御が行われます。

角館神明社

創建の時期は定かではありませんが、天照大神を祀る伊勢信仰が中世以降全国に広がるなか、古城山の一角にあり戸沢氏も厚く信仰したと伝えられています。のちに田町山へ、そして佐竹北家により現在地に移されましたが角館の總鎮守として、信仰を集めています。

9月7日例祭、宵宮祭、8日神輿神幸祭が行われます。

角館出身の秋田蘭画家小田野直武(1749～1780)が描いた「花下美人図」絵馬が奉納され、その絵馬は現在武家屋敷の一角にある平福記念美術館に保管されています。

江戸時代の紀行家、菅江真澄終焉の地の碑もあります。

角館のお祭りの歴史

江戸時代に角館を治めた佐竹北家による1674年（延宝2年）～1894年（明治27年）の220年間に亘る記録である『北家御日記』の記述を中心に角館の祭りの起源を探ります。

【江戸時代】

1694年
（元禄7年）

「鹿島祭り」各丁内ごとに人形を乗せた船をつくり、北家へ御目にかける。」

『北家御日記』　閏5月24日

角館で行われた祭りに関する記述の初見。鹿島神社は、城下町の守護神として鬼門（北東）に祀られ、鹿島祭りではヤマならぬ船に人形を乗せて町を練り領主の佐竹北家の上覧を仰いでいる。北家御日記の鹿島祭りの記述は1706年（宝永3年）にもあり、更に1770（明和7年）には「船」ではなく「鹿島山等上る」とあり、鹿島祭りに角館のお祭りの原形を垣間見ることができる。鹿島祭りの記述はその後途絶える。

※丁内（うちまち）とは、武家の住む武家屋敷（内町）以外の町人の町、外町（とまち）のことで、外町は横町（よこまち）・上新町（かみしんまち）・岩瀬町（いわせまち）・下新町（しもしんまち）・中町（なかまち）・下中町（しもなかまち）・七日町（なのかまち）・西勝楽町（にしかつらくちょう）・下岩瀬町（しもいわせまち）の九丁からなっていた。

1799年
（寛政11年）

勝楽町薬師祭礼に付き、町々より山都合40ばかり表門より見る」

『北家御日記』　8月8日

この年角館所領は7代佐竹義文（さたけよしふみ）に替わり、それを祝うかのように薬師堂祭礼にヤマが出された。寛政年間に外町（とまち）の各丁からヤマが出されて佐竹北家の門前で上覧を仰いでいた。

薬師堂祭礼はかつて12月に行われていたが、1732年（享保17年）に8月8日への移行願いが出され認められる。ヤマは薬師堂祭礼に出されたものであった。

1818年
（文政元年）

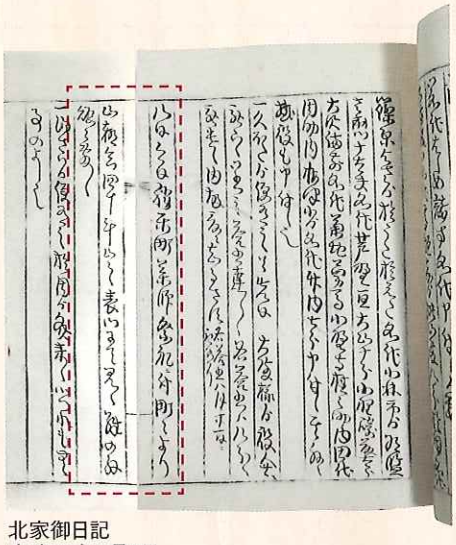
「雨天のため夕過ぎ踊り山ばかり来、家臣より見物の願いが出たが不許可。翌7日祭り山御門前に来る」

『北家御日記』　8月6日

1838年（天保9年）の吉成市左エ門の日記にも「祭り山甘日町（はだちまち）は踊山、外の丁は吊り山」という記録もみられる。吊り山は大勢で担ぐヤマである。踊り山の詳細は不明だが、神を祀るヤマとは異なる余興としての踊りのためのヤマで、踊りには当然囃子が奏でられることが想像でき、ヤマと囃子・踊りの結びつきはこの頃にさかのぼることができる。

またヤマは1694年（元禄7年）の鹿島祭りですでに人形を乗せた船を出していることから、人形を乗せたものであったと思われる。

ヤマは各丁内のほか大きな商家が個人で出す場合もあり、丁内から出るヤマを“オヤマ”、個人が出すヤマは“コヤマ”と呼ばれた。



北家御日記
寛政11年8月8日
（秋田県立公文書館蔵）

北家御日記 表紙
寛政11年7月～12月
（秋田県立公文書館蔵）

【明治・大正】

1874年
（明治7年）

「明日は旧暦8月6日に付き町9丁今晩より飾り人形または踊り等賑々しい」
『北家御日記』 9月15日

「七日町一丁は祭山差出し・・雨のため神輿は明日廻る」
『北家御日記』 9月16日

「神明社の神輿が廻り表門より見る。これまで神明社神輿は6月15日に、薬師堂神輿は8月6日であったが薬師は廃止、神明社の神輿今日となる」
『北家御日記』 9月17日

1878年
（明治11年）

「旧暦8月6日につき神明社の神輿が廻り、岩瀬町、下新町、下仲町、勝楽町、七日町より飾山一台ずつ、また置人形も各丁に」
『北家御日記』 9月2日

明治元年の戊辰戦争は角館にも及び、更に秋田県でも明治3年から神仏分離政策が進められて薬師堂も一時期それまでの寺から勝楽神社と神社名となり、祭りを主宰するものがなくなり薬師堂の祭りはしばらく途絶えるが、神明社の例祭時にヤマが繰り出され踊りも行われた。

1880年
（明治13年）

「勝楽町薬師の仏輿今年より廻ることと届けあり」
『北家御日記』 8月30日

「神明社の神輿巡幸・・今年より表門に扇御紋の幕を張る。横町、岩瀬町、上新町、勝楽町の飾山、外に安藤利助の自分山が来た」
『北家御日記』 9月11日

「今日より曲馬興行あり女児と見物に」
「薬師の神輿廻り、練子も20名弱来る」
『北家御日記』 9月12日

明治13年までに薬師堂は勝楽神社から真言宗のお寺に還り、僧侶が主宰となって神明社祭礼、薬師堂例祭にヤマが出される。ヤマが両者の祭礼に出されるようになったのはこの年からと言われている。
曲馬興行も催されて賑やかさが感じられる。

1882年
（明治15年）

「郷社神明社の神輿行事」
『北家御日記』 10月27日

「午後9時頃横町若者どもより祭山が来て表門より見る」
『北家御日記』 10月28日

1885年
（明治18年）

「今日旧8月6日、郷社神明神輿行幸」「仲町、下新町祭山」
『北家御日記』 9月14日

「西勝楽町薬師神輿巡幸」
『北家御日記』 9月15日

1892年
（明治25年）

「旧8月6日、郷社神明神輿行幸」
「西勝楽町踊り山上る。車にて引き芸者25人が揃いの衣装に花笠をかぶり、4人は三味線、2人は太鼓を、そして2人ずつ手踊り」「午後3時頃、横町飾山が上る。続いては木綿70反（たん）を要して作った横町の飾山。木綿100反（たん）を要した岩瀬町の飾山。木綿70反（たん）を要した下新町も飾山。そして下中町の飾山」
『北家御日記』 9月26日

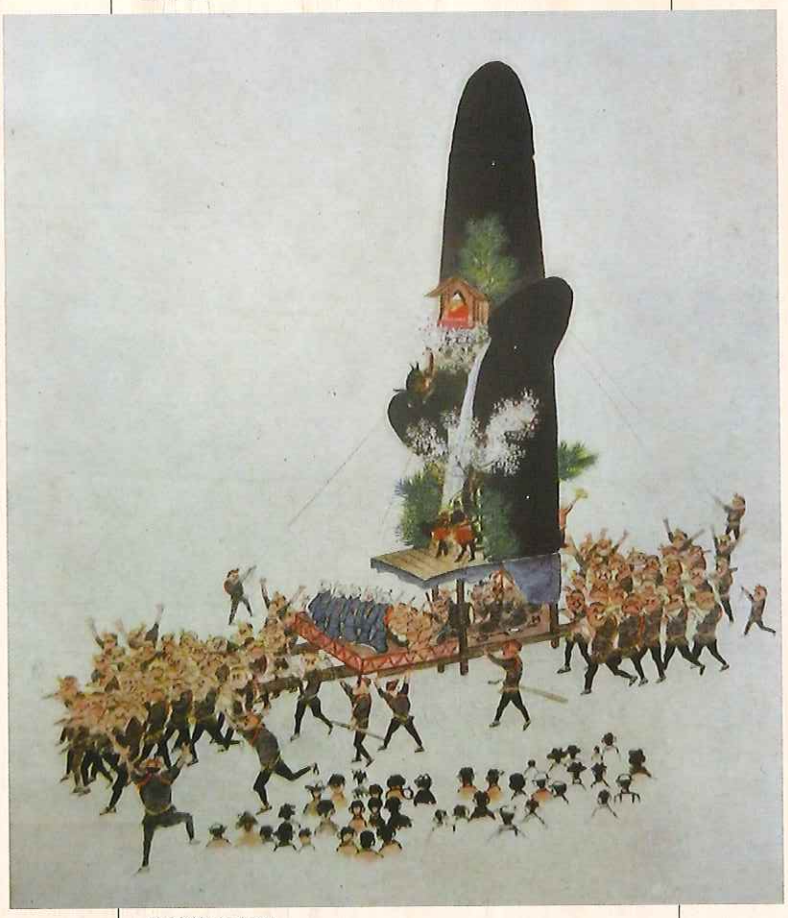
「午後薬師の神輿巡幸」
『北家御日記』 9月27日

明治25年の祭りの様子が詳しく記されている。踊り山は曳山で囃子や踊りの構成が分かる。また飾り山は骨組みに木綿を掛けた岩山と飾り人形を施したもので、各丁が近村などの人々の助けを借りて担いで運ぶ担ぎ山であったが、巨大化して高さ18メートルに達するものもあった。
大人数の担ぎ手の確保が困難となり、明治中期より一部丁内では車輪を付けた曳山が登場する。更に電線の架設にともない巨大なヤマの運行が難しくなり、ヤマの小型化と車輪式の曳山が増えて、明治43年以降はすべてが曳山となる。
各丁内でヤマの構造の試行が繰り返されて、1914年（大正3年）に丸太の輪切りを車輪とする形態の比較的大型のヤマが8台出る。更にはヤマに手綱をつけて曳山となったが、ヤマの規模は小さいものとなった。かつての岩などをかたどった巨大なものは、置山として丁内に設けた。

【昭和・平成】

大正初期からヤマの形態は大きく変化を遂げるが、昭和初期には、それまでヤマの部位を縄で結びつけていたものが、ボルトにより接続するようになった。

昭和2・3年頃の曳山／長木とかじ取りの棒が見える
『角館祭りのやま行事報告書』より



角館飾山古図
『日本民俗芸術大観第1集 飾山囃子の記録』
（昭和7年 郷土研究社）

大きな岩・滝・樹木・人形を乗せた巨大ヤマを大勢で担ぎ運ぶ様子が描かれている。ヤマの上では囃子方に合わせて踊りが舞われている。この様な形態はおそらく江戸時代から引き継がれたものと思われる。

1930年
（昭和5年）

角館のお祭りの囃子と踊りが「飾山囃子」として第5回郷土舞踊と民謡の会（日本青年会館）に出演する。レコード吹込み、活動写真、ラジオ出演、青山会館の民謡大会にも。

『角館時報4.15』

昭和5年の第5回郷土舞踊と民謡の会への出演により郷土研究社の『日本民俗芸術大観第1集　飾山囃子の記録』（昭和7年）が出版されて全国へ「飾山囃子」は知れ渡る契機となる。

昭和8年の置き山『角館祭りのやま行事報告書』より

昭和32年の曳山『角館祭りのやま行事報告書』より

1935年
(昭和10年)

いかに衝突せずにヤマを運行させるかが常識だったが、この頃からヤマの激突「やまぶっつけ」が行われるようになる。

『秋田魁新報　平成2年9/9』

戦争の勃発により若者の数も減少して祭りにも戦時色を反映したものとなる。昭和19年にはヤマは横町1台のみとなるが戦時中もヤマは途絶えることはなかった。

昭和15年の曳山
『角館祭りのやま行事報告書』より

1952年
(昭和27年)

7、8、9日の3日間、11の町内で曳山を、また駅前通りの十字路には55尺(10数メートル)の置山。9日夜には徹夜で曳山の激突が。晴天にめぐまれ人手はざっと4万人。

『秋田魁新報　9/11』

「曳山コンクルール」がこの年から始まる。(昭和47年には一旦途絶える)

『秋田魁新報
平成2年9/9』

昭和28年の曳山
『角館祭りのやま行事報告書』より

1953年
(昭和28年)

祭りのポスターは「角館町祭典」

『秋田魁新報　9/2』

1954年
(昭和29年)

12の町内で曳山、駅通り十字街に置山。人出は4万人。最後の夜はヤマブツケも。ラジオ東北で「お山ばやしと激突」と題し13日に放送。

『秋田魁新報　9/11』

1960年
(昭和35年)

今日から角館町の祭典で各町からヤマ8つ。今年は高さ20メートルの大置山が道路をはさんで岩瀬町と下新町の2ヵ所にかざられる。

『秋田魁新報　9/7』

1965年
(昭和40年)

10、11、12日飾山ばやしの祭典。11日に観光用の名物山ぶつけが町内5カ所で行われた。

『秋田魁新報　9/12』

昭和20年代後期から「やまぶっつけ」の激しさが増して、本来の祀りごとから離れた「やまぶっつけ」が祭りの象徴的存在となってしまう傾向がみられ、名物として観光客を集める催しともなった。

1967年
(昭和42年)

7、8、9日角館の祭典。田沢湖線の開通で県外からの見物客も訪れる。13台の山車、立町と神明社前に大置山。

『秋田魁新報9/9』

1976年
(昭和51年)

3日間で昨年より1万人増え、22万人の人手。角館町始まって以来の激しい山車ぶつけが展開された。

『秋田魁新報　9/18』

「おやまばやし」が9月8日東京銀座まつりに出演。200人が2台の山車を曳いて披露する。山車は解体して輸送し現地で組み立てる。

『秋田魁新報　10/7』

1986年
(昭和61年)

角館町の秋祭りが7日に幕を開けた。今年は去年より1台増えた16台の山車。

『秋田魁新報9/8』

参加するヤマは昭和30年代より徐々に増え、この年は東部が初めてヤマを出し16丁になる。現在は18地域から18台のヤマが出ている。かつて外町9丁の祭りから角館の市街地全域にわたる丁内の祭りとなった。

1990年
(平成2年)

「角館のお祭り」保存会が1月発足。2月「角館のお祭り」が角館町無形民俗文化財に指定される。3月「角館秋祭りの曳き山行事」として秋田県無形民俗文化財に指定される。

『秋田魁新報1/15　2/2』

1991年
(平成3年)

「角館祭りのやま行事」として国の重要無形民俗文化財に指定される。

1994年
(平成6年)

平安遷都1200年祭に角館祭りのヤマが招かれ大好評を得る。

角館のお祭り 三日間

角館神明社の例祭・成就院薬師堂祭典にあわせて各丁から18台のヤマを繰り出して、神明社・薬師堂への参拝、また江戸時代からの慣わしで佐竹北家当主の上覧を仰ぎ囃子と踊りを奉納するためにヤマを町中曳き回します。
各丁には丁内の「境界(けいかい)」があり、また丁内には祭り期間中神明社・薬師堂の御輿をお迎えして、自丁内を取り仕切る「張番(はりばん)」が設けられます。

ヤマが他丁の「境界」に差しかかると「張番」に入丁許可を得る必要があり、許可されると入丁し「張番」に囃子と踊りを披露します。
またその丁内を出るときも「張番」に御礼を述べて次の丁へ向かいます。多くの「張番」があるため、ヤマの曳き回しは町を一気に進むことはありません。

境界を示す旗(国旗)を掲げている丁内もある

ヤマが神明社・薬師堂・北家上覧に向かう曳き回しを「上(のぼ)り山」、帰路を「下(くだ)り山」と呼びます。お囃子も「上り山」で囃す上り囃子、「下り山」の下り囃子と変わります。
ヤマ同士がすれちがう際には、各ヤマの交渉員が通行に関する交渉を行いますが、基本的には「上り山」に通行優先権があります。交渉が決裂したときは、ヤマとヤマとの激突「やまぶっつけ」となることがあります。

張番(はりばん)

外町の丁内は、江戸時代から続き今も維持され、さらに祭りに加わる地域も拡大して現在は30丁を超え、それぞれに張番が設けられている。
矢来(やらい)(細い板で組んだ仮りの囲い)にススキを取り付け、正面に名札と松を立て、室内には幕をはり「薬師瑠璃光如来」や「天照皇大神」の掛軸を掛け、壇を組んで供物を捧げる。

入丁の交渉

横町東部張番には平福工場(P22参照)の印のある明治36年の見事な幕が取り付けられている

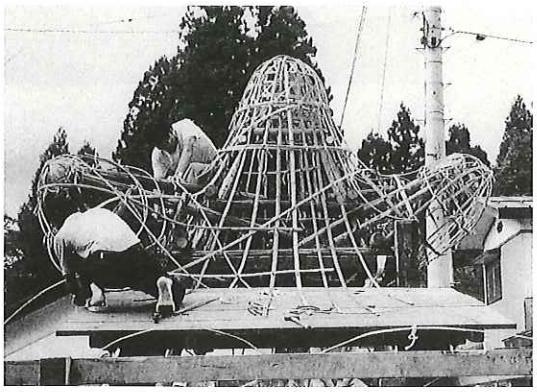
置山

祭り期間中、薬師堂、神明社、立町、駅広場、下新町に置山が設けられ、ヤマ・置山と角館の町中で神仏を迎えて地域の繁栄、豊作、無病息災を願います。

薬師堂置山

神明社置山

立町置山



木と竹で山を作る様子
『角館祭りのやま行事報告書』より

9月7日

10:00

角館神明社例祭

拝殿で雅楽が奏でられ、修祓(しゅうばつ)の儀、祝詞奏上、玉串奉典、神楽奉納等厳かに例祭が執り行われる。

例祭神事

例祭神事

例祭神事

16:00

角館神明社参拝 囃子と踊りを奉納

18台のヤマが参拝に訪れる。各丁が神明社の鳥居前にヤマを付けて囃子と踊りを奉納する。奉納のさなか、若者・子供は拝殿で参拝してお祓いを受ける。その後神官が鳥居まで降りてヤマを清める。ひとつのヤマが参拝を終えるまで約30分近く要するので18台が参拝を終えるのは深夜に及ぶ。

神明社への囃子奉納

神明社への踊り奉納

神明社への通りに18台のヤマが一列に並ぶ

責任者が拝殿で参拝

20:00

角館神明社宵宮(よいみや)祭

各丁の参拝・奉納が続くなか、拝殿では宵宮祭が行われる。

宵宮祭神事

9月8日

7:00

角館神明社神幸祭

神輿を祓い、拝殿で神事が行われて神霊を神輿に移す。神輿は8時に神明社を出て、昼時に横町にある御旅所(平賀源内の宿泊した角館で一番古い商家)を経て夕刻まで町を神幸する。

神霊を神輿に

武家屋敷での神幸

10:00

成就院薬師堂祭典

薬師堂で塗香授与(お清め)、法楽(読経)など祭典が行われる。

※祭典は井川町の真言宗智山派實相院の僧侶により執り行われた(平成27年)。

薬師堂祭典

10:00

佐竹北家上覧
(旧石黒恵家)

江戸時代から慣わしで18台のヤマは、囃子と踊り、そして人形など装飾が毎年変わるヤマの出来ばえを佐竹北家当主に披露する。現在は表町上町の旧石黒(恵)家で当主が上覧する。

当主に囃子と踊り、ヤマを披露

21代当主佐竹敬久氏が上覧
(平成27年)

囃子と踊りのコンクールの審査もここで行われる

9月8日

午後
※9日夜まで

成就院薬師堂参拝
囃子と踊りを奉納

18台のヤマが薬師堂に参拝。各丁が薬師堂の鳥居前にヤマを付けて囃子と踊りを奉納する。
神明社での参拝・奉納と同様に囃子が奏でられるなか、若者・子供は薬師堂に参拝してお祓いを受け、僧侶はヤマをお祓いする。
薬師堂参拝は各丁ヤマの曳き回しの都合で翌日9日夜まで行われる。

参拝

参拝

囃子・踊りの奉納

夕方
※夕方から夜にかけて

観光やまぶっつけ

角館のお祭りの名物のひとつがヤマ同士の激突「やまぶっつけ」。基本的には9日深夜に多くみられるが、それはいつどこで行われるかは決まっていないために、何か所かあらかじめ場所、時間を決めて観光用に「やまぶっつけ」を行う。観光用といっても驚きの迫力。
観光やまぶっつけが終了しても、深夜までヤマは曳き回されて本番の「ぶっつけ」が始まることもある。

激突の瞬間
ヤマの上の
踊り子と人形は大変

観光やまぶっつけ

観光やまぶっつけ

9月9日

6:15

成就院薬師堂 御輿巡行

薬師堂の御輿は常に堂の中央に置かれており、僧侶がお祓いした後、堂の外へ運び台車に据え付け7時に薬師堂を出発し、夕刻まで巡行する。

薬師御輿巡行

薬師御輿巡行

※8日午後から9日夜まで

成就院薬師堂参拝 囃子と踊りを奉納

8日に参拝しなかった丁内が夜まで薬師堂に参拝する。

夜から早朝

やまぶっつけ

夕刻から各丁内曳山それぞれの作戦のもとヤマを曳き回し、各丁で囃子や踊りを繰り広げるが、この日は通行優先権をめぐる駆け引きが激しくなり、交渉が決裂すると、すなわち「やまぶっつけ」が発生する。

やまぶっつけ（本番といわれる、やまぶっつけ）

ヤマの前で、向かい合ったヤマから二名の交渉員が出て交渉をする

角館のお祭りでの囃子は、大太鼓、小太鼓、鼓、笛、摺鉦、三味線で6～7人がヤマに設けられた巨大な山の下部の狭いスペースで演奏します。踊り手は奉納、門付、各丁張番などヤマの曳き回しのさなか何度もヤマの前舞台で踊ります。

おやま囃子

【囃子と踊り】

ヤマの上で囃し、踊られるのが「おやま囃子」。かつては「大山囃子」と呼ばれましたが、昭和5年東京での第5回郷土舞踏と民謡の会(日本青年会館)に「飾山(おやま)囃子」の名称で出演し『日本民俗芸術大観第1集 飾山囃子の記録』(昭和7年・郷土研究社)で広く紹介されました。またこの時の上京ではレコード吹込み、活動写真、ラジオ、他会場での民謡大会への出演も行っています。この活動で「おやま囃子」の名は全国に広まりました。

◆囃子・踊りの起源

祭りでの囃子の起源は江戸時代からのもので、1839年(天保10年)町内祭礼記録に囃子方を雇い入れたことが記されています。

また踊りは文政年間(1899～1830年)に「辻踊り」と呼ばれるものがあり、近在からの芸能者が農閑期に町の辻などで踊りや唄を披露し祝儀を集めており、この集団には祭礼は絶好の稼ぎどきであったと思われ、囃子と踊りは江戸時代から祭りにつきものでありました。文化・文政・天保の『北家御日記』の祭りの記述にも「踊り山」という表記がみられますが、その形態は囃子・踊りを現在のようにヤマの上で行ったものでないようで、明治後期以降大正時代始めにヤマの車輪化が定着して曳山となり、前舞台が設けられ現在の形態となったと思われます。

おやま囃子芸能発表会(平成27年)

◆囃子と踊りの曲

囃子

◎囃子はヤマが出発して丁内に戻り、ヤマが納められるまで囃し続けられる。

【寄せ囃子】……ヤマが動くことを知らせる囃子。

【上(のぼ)り山囃子】……神明社・薬師堂参拝など目的地に向かう際の囃子。「大山囃子」とも呼ばれる。

【下(さが)り藤】……ヤマの方向転換時の囃子。

【道中囃子】……「下り山囃子」とも呼ばれ、目的地からの帰路での囃子。

【神楽囃子】……「やまぶっつけ」の際に奏でられる囃子で「ぶっつけ囃子」とも呼ばれる。

踊り

◎奉納や北家上覧、張番などで踊られる曲で踊り手は原則として紫色の紋付の振り袖で舞う。

【拳囃子】【二本竹】

◎町内を賑わす余興の踊りで、衣装の色も華やかなものやかすりの着物で舞う。

【秋田甚句】【秋田おばこ】【おやまこ】【おいとこ】【秋田音頭】【組音頭】 など

【ヤマを飾る人形】

ヤマの上には踊りのための前舞台があり、その後ろには松をあしらった黒木綿で作った巨大な山(もっこ)と武者人形や歌舞伎人形が飾られます。またヤマの後部には「送りっこ」という人形が乗せられます。

山(もっこ)は神がいる場所との考えからヤマに据えて、
そこに神を迎えるためのものです。
人形は目に見えない神という存在を現実に認識させる
手段として飾られます。

角館の祭りの飾り人形は元禄時代の角館の祭り(鹿島祭り)に遡る歴史あるものです。しかし当時の人形がどのようなものであったか、今となっては定かではありません。記録としては、文政年間(1818～1830年)に角館の四条円山派の絵師、武村文海が秋田市の山王祭に飾る人形を制作したとあり、当然角館でも人形を制作したと考えられます。

文海の弟子の角館の画家平福穂庵(ひらふくすいあん)も、明治13年頃から人形作りに携り、人気を博しました。今も当時からの流れをくむ人形師によりヤマの人形は角館で作り続けられています。

踊りの衣装は、紫の紋付、かすりのおばこ姿

ヤマに飾った人形の目入

ヤマ18台

昭和初期までは藩政時代からの外町である、横町・上新町・岩瀬町・下新町・中町・下中町・七日町・西勝楽町・下岩瀬町の九丁から出されていたヤマは、参加する地域の拡大と複数丁内が併せてのヤマ出しと変化して現在は18台が町を曳き回されます。

西勝楽町若者
西勝楽町若者
秋月会
西勝楽町若者

桜美町若者
桜美町若者

七日町丁内
七日町丁内
雑子わらび座
踊り藤美会
小松作

中央通り

横町若者
八幡大菩薩
横町若者
横町若

山根谷地町旭会若者
山根谷地町旭会若者
独眼竜 関白謁見
山根 谷地町 旭会 若者

ヤマ18台

北部丁内若者
北部丁内若者

上新町若者
上新町若者
上新町若者

下岩瀬町若者
下岩瀬町若者
下岩瀬町若者

東部若者
東部若者
もつ面
東若

大塚若者
大江山鬼伝説
大塚若者
大塚若者
大塚

川原町若者
川原町若者

継承される角館のお祭り

祭りの歴史を
これからも
守り続けてくれる
子供たち。

角館保育園のヤマ

8日角館保育園の園児が神明社に参拝のためヤマを曳き回す。堂々と張番への挨拶、囃子も子供たちが行う。

若い踊り手

大人が出すヤマでも踊りの主役は、子供たちや若い世代。

観光案内にも子供たち

中学生が観光客に祭りの案内をして祭りをバックアップしている。

歴史と文化の町 角館

武家屋敷
（国指定重要伝統的建造物群保存地区）

佐竹藩支藩の城下町に形成された武家屋敷で、藩政時代の地割が踏襲され広大な屋敷に住宅、表門、板塀、屋敷林等が残っています。シダレザクラ、新緑、角館のお祭り、紅葉、雪模様と四季の景色はそれぞれ美しく武家屋敷に映ります。

角館のシダレザクラ
（国指定天然記念物）

藩政時代、武家屋敷に植えられたシダレザクラが多く残っています。佐竹北家2代佐竹義明の正室が京都から持ってきたものとの伝もあります。
武家屋敷以外の外町の家の庭にも多く、開花の時期には町中でシダレザクラが咲き誇ります。

桧木内川（檜木内川）堤のサクラ
（国指定名勝）

町の西を流れる桧木内川左岸堤防の道路両側に今上天皇の誕生を記念して、昭和9年に植栽されたソメイヨシノの並木は約2㎞に及びます。シダレザクラとともに4月下旬から5月初めに角館は桜の町と化します。

角館

古い歴史に育まれた
伝統文化と自然が
今も残る桜の町。

樺細工
（国指定伝統的工芸品）

樺細工はヤマザクラの樹皮を加工したもので、樹皮の模様や光沢が魅力の伝統工芸品です。藩政時代に北秋田の阿仁地方から武士の内職として、その技法が移入されて印籠などが作られました。現在はその美しさが広く認知され、海外からも注目されています。

角館樺細工伝承館
仙北市角館町表町下丁10-1
TEL 0187-54-1700

樺細工を加工したピアノ
（平福記念美術館）

イタヤ細工
（県指定伝統工芸品）

イタヤカエデの若木の幹を帯状に裂いて編み上げる伝統工芸品です。カゴ、お盆、つづら、インテリアなど様々な製品があります。藩政時代に農家の副業としてイタヤ細工の蓑を作り近隣へ販売したのが発祥で、その技法が今も受け継がれています。角館雲然の蓑作りの技法は、秋田市太平黒沢地区の技法とともにイタヤ蓑製作技術として国無形民俗文化財に指定されています。

イタヤ細工を継承する工房
（武家屋敷松本家）

【参考】『角館祭りのやま行事報告書』角館町教育委員会／平成9年
『角館誌　第二・三・四・六・七・九・十一巻』角館誌刊行会／昭和40年～平成8年
『角館の祭り』富木耐一　無明舎出版／昭和57年
『日本民俗藝術大観　第一集』民俗藝術の會　郷土研究社／昭和7年

小田野直武と秋田蘭画

小田野 直武　国指定重要文化財 不忍池図(複製)
平福記念美術館蔵

角館の角館北家の家臣小田野家の生まれで、幼少より絵を好みましたが、佐竹本家から俸禄を受ける給人となり、1773年鉱山開発のために秋田藩を訪れた平賀源内に陰影法や遠近法などの西洋画技法を学びます。同年、銅山方産物吟味役を拝命して江戸に上り、源内のもとに寄寓し前野良沢、杉田玄白による『解体新書』の附図を描きます。
直武は秋田藩主佐竹義敦(曙山)、北家当主佐竹義躬に西洋画技法を伝えて彼らが中心となり、この技法を取り入れた秋田蘭画が誕生します。直武の洋風画は、江戸後期司馬江漢に受け継がれました。

平福穂庵・百穂

平福 穂庵
八僊人(はっせんにん)
平福記念美術館蔵

角館出身の平福穂庵(1844～1890)は近代日本画の先駆者のひとりで、その子の平福百穂(1877～1933)は父に学び、自然主義、写実主義に基づく絵画を多く残しました。
穂庵は7歳の頃から円山四条派の画家、武村文海に学び、12歳から秋田藩の藩校「明徳館」に通い、16歳の頃には絵を学ぶため京都へ遊学しました。明治になり角館に戻り各地で写生に励み独特の画法を生み出し、明治13年「乞食図」の連作でその名を高めました。角館のお祭りにも深く関わり、ヤマの人形にも大きな影響を及ぼしました。
百穂は父穂庵から絵を学び、京都で研鑽を積み東京美術大学に入学。卒業後は自然主義的写実や中国の古典との融合した作品を発表します。また秋田蘭画の紹介に努め、アララギ派の歌人としても活動しました。岩波文庫の表紙の「鳥獣花背方鏡」を模した図案は1927年創刊以来のものですが、百穂によるものです。

平福 百穂
五位鷺(ごいさぎ)
平福記念美術館蔵

平福記念美術館
仙北市角館町表町上丁4-4
TEL 0187-54-3888

角館へのアクセス

◆新幹線を利用の場合

東京駅 ―東北新幹線― 盛岡駅 ―秋田新幹線― 角館駅 … 約3時間15分
仙台駅 ―東北新幹線― 盛岡駅 ―秋田新幹線― 角館駅 … 約1時間30分
盛岡駅 ―秋田新幹線― 角館駅 … 約45分
秋田駅 ―秋田新幹線― 角館駅 … 約45分

◆車を利用の場合

東京 ―東北自動車道― 盛岡 … 約6時間30分
仙台 ―東北自動車道― 盛岡 … 約2時間20分
青森 ―東北自動車道― 盛岡 … 約2時間10分
八戸 ―八戸自動車道― 盛岡 … 約1時間30分
盛岡 ―国道46号― 角館 … 約50分

秋田 ―国道13・46号― 角館 … 約1時間
秋田空港 ―国道13・46号― 角館 … 約50分
大曲IC ―国道105号― 角館 … 約40分

『里・かくのだてNO1357』桂の里社／昭和47年～50年
『祇園会と飾山囃子』蔦谷秋山　弘文堂印刷所／平成2年
『都市と生活文化』吉川圭三　吉川弘文館／平成5年
『図説・角館城下町の歴史』林正宗　無明舎出版／昭和57年　他

発行／角館のお祭りの保存継承と地域活性化実行委員会
【事務局】〒014-0392 秋田県仙北市角館町東勝楽丁19
（仙北市教育委員会文化財課内）
TEL 0187-43-3384

平成27年度文化庁文化芸術振興費補助金
（文化遺産を活かした地域活性化事業）
平成28年1月